

エネルギーを 学ぶ・伝える・考える



田上町の課題となっている放置竹林を伐採し、運搬作業に励む田上中学校の生徒たち

放置竹林が 地域の大きな課題に

梅と並ぶ田上町の特産品に、たけのこがあります。町内には約17ヘクタールもの竹林があり、豊かな自然と土壌に恵まれた田上町産のたけのこは、アクやエグミが少なく、香りが良いと評判です。旬の時期、道の駅や直売所には採りたてのたけのこが並び、多くの人が買い求めます。

一方で、高齢化や人口減少により竹林の手入れが行き届かず、たけのこの生育に悪影響を及ぼしたり、熊の隠れ場になったりする事態が相次いでいました。ときには、地権者が分からない竹林が道路にはみ出て道を塞ぐこともあり、地域の大きな課題となっていました。

そこで田上中学校では、地元のボランティア団体「あじさい塾」から声を掛けられたことをきっかけに、2011年から地域と連携した竹林整備活動をスタートしました。当時、週末は部活動が行われていたことから、部活動単位で年一回、交代で竹林整備に参加していました。

生徒が主体となって 取り組む竹林整備

転機が訪れたのは2021年。高さ10〜20mほどの竹がいまだに放置されている現状に問題意識を持った当時の生徒会と環境委員会は、全校生徒に竹林整備のボランティアを募りました。「多くの生徒が地域課題に対して自ら考え、進んでボランティア活動に参加する姿に成長を感じました。主体的に行動する生徒を育てることは、本校の歴代校長が一貫して力を入れてきた学校教育です」と小野先生。

10月に行われた放置竹林整備活動では「あじさい塾」の方々のサポートのもと、生徒たちは半日ほどかけて竹を切り、運び出す作業に挑戦。作業を終えた感想は「竹林整備は楽しい」「地域の役に立てて嬉しい」など肯定的な声が多く、先生方はとても驚いたそうです。当時、環境委員会を担当していた小田川琢郎先生は「見違えるほどきれいになった竹林を前に、生徒たちは環境への意識が高まり、大きな達成感を感じているのが伝わってきました」と嬉しそうに振り返ります。

地域とともに 輝く子どもたちを育てる

新潟県のほぼ中心に位置する田上町たがみまち。新潟駅や燕三条駅から車で1時間圏内と訪れやすい立地でありながら、東側には新津丘陵、西側には広大な蒲原平野が広がる自然豊かな町です。

田上町の特産品のひとつは梅。小高い場所にある梅林公園には、隣接する梅畑と合わせて、約2000本の梅の木が植えられています。そのほとんどが、種が小さく果肉が多い「越の梅」。毎年6月から収穫され、全て県内で消費されています。

田上町唯一の中学校として1947年に創立された田上中学校は、その梅林公園の隣に建っています。キャッチフレーズは「地域とともに輝く」。地域とつながり、地域の未来を考える「地域学習」を通し、全校生徒230人が個性や可能性を大切に、一人ひとり活躍できる学校教育に取り組んでいます。

校長の小野浩先生は田上中学校の卒業生。「田上で生まれ育った子どもたちは、小学校で梅の収穫や田植えなどを体験し、中学校で地元の歴史や文化継承の大切さを学びます。小学校から中学校の過程で、地域の魅力を知る伝統があります」

訪れた場所

田上町立田上中学校
新潟県南蒲原郡田上町大字原ヶ崎新田2700



▲田上中学校校長の
小野浩先生



▲佐藤明子先生
(2023年度3年生担任)



▲小田川琢郎先生
(2024年度3年生担任)



▲2021年10月、生徒会と環境委員会によるボランティア活動で竹の伐採作業を体験。地域ボランティア団体「あじさい塾」が生徒をサポートしました



1. 「たがみバンブー」初開催に向けて、竹あかりを製作する生徒たち。竹に穴をあけ、模様を施しました
 2. 「道の駅たがみ」に展示された生徒お手製の竹あかり。多くの来場者を魅了しました
 3. 「たがみバンブー」のイルミネーション。自生する竹林の中で竹あかりの風景が幻想的に広がります



4. 「道の駅たがみ」で開幕された「たがみバンブー」のオープニングイベント「良宵たがみ」
 5. 特設ブースでは、田上中3年生が特産品を使ったパフェやオリジナルグッズを販売しました
 6. 「田上中プレゼンツSHOW TIME」で踊りを披露する生徒たち。盆踊りで流れる田上甚句をヒップホップダンス風にアレンジしました

「たがみバンブー」

田上町の地域資源である竹の整備事業に、地域が一体となって力を注いだ翌年の2022年、地元の商工会青年部は、放置竹林で自分たちが伐採した竹を活用した町おこしプロジェクトを立ち上げました。竹に穴をあけ、LEDライトを入れてライトアップする竹あかりで地域を盛り上げたい。こうして「たがみバンブー」(ブーは英語で「驚かす」の意味)がキックオフ。熊本県を拠点に活躍する竹あかり総合プロデュース集団「CHIKAKEN」の監修のもと、200人以上の地元の人たちが力を合わせ、7カ所にも及ぶライトアップ会場づくりに取り組みました。田上中学校でもワークショップを開催。生徒会や環境委員会の呼びかけで集まった生徒たちは、「道の駅たがみ」に展示する竹あかりを製作しました。10月に開催された「たがみバンブー」は1カ月で町の人口の2倍を超える約2万人の来場者数を記録。竹のイルミネーションと生徒たちが丹精込めて完成させた竹あかりが、訪れた人々を照らし、大成功に終わりました。

「良宵たがみ」の企画を通して大きく成長した生徒たち

2年目の開催となる「たがみバンブー12023」では、田上町に足を運ぶ人々をさらに驚かせようと、「道の駅たがみ」でオープニングイベントを開催することにになりました。商工会のメンバーに協力を依頼された田上中学校の3年生は、田上町の『本物』にこだわり、地元の歴史や文化、特産品などの魅力を存分にPRするブース出展に向けて、総合学習の授業全てを利用して、さまざまなアイデア出しを行います。商工会メンバーや県内で活躍するクリエイターなどの専門家からアドバイスをもらいながら、生徒たちはオリジナルテイあふれる出店に向けて準備を進めました。

9月、「良宵たがみ」と名付けられたオープニングイベントが「道の駅たがみ」で開幕し、当日は多くの来場者でにぎわいを見せました。生徒のアイデアを生かした特設ブースには、田上町に伝わる「団九郎伝説」にちなんで考案した「団九郎パフェ」や、「団九郎マグカップ」、竹林を

イメージした抹茶ポッキーのスイーツなどおいしくてかわいい商品が並び、町の多くの人たちにたくさん購入いただいたそうです。

また、30分間のステージ企画「田上中プレゼンツSHOW TIME」では、団九郎伝説の朗読や、田上地域の伝統芸能『田上甚句』を現代風ダンスで表現。

当時、3年生の学年主任だった佐藤明子先生は「田上中はどちらかというとおとなしい生徒が多く、自分の思いや考えを表現することはあまり得意ではありませんでした。大勢の人たちの前で歌を歌ったり、踊ったりできるか心配でしたが、立派に演じ切る姿を見て、私たちの方が感動をもらいました」と話します。

生徒たちも「自分たちが考えたことが形になって夢のよう」「イラストを描いて一生懸命つくり上げた商品が人の手に渡って感動した」「売れ残りがないように一生懸命売って、町の人たちが温かい声で応えてくれて嬉しかった」と喜びを語っていたそうです。

同年、町制施行50周年を迎えた田上町の記念式典において、3年生の代表生徒



▲町制施行50周年記念式典で行われたパネルディスカッションでは、田上中の代表生徒4名が「田上町のこれから」について真剣に考え、意見交換を行いました

は、田上町の将来を考える「未来の田上町」劇を発表。先生方は、『良宵たがみ』の経験が生徒たちの大きな成長につながった」と口を揃えて話します。記念式典のパネルディスカッションに参加した生徒は、「先日行われたボランティア活動に初めて参加し、放置された竹林整備の必要性を実感しました。また、竹あかりの製作では竹の魅力を改めて知りました。地域資源の竹を活用することは大切なことだと思います。少子高齢化の中で、今後も若い私たちが積極的に動いていければと思っています」と想いを伝え、竹林をきっかけに自分たちが暮らす町に対して関心が高まっている様子が垣間見えました。

地域と連携した取り組みで

「新潟県環境賞」を受賞

同校は、地域資源と地域コミュニティを大切に、町の活性化につながる竹林整備ボランティア活動に取り組んだことが評価され、「令和5年度新潟県環境賞 環境保全部門」を受賞しました。小田川先生は、「昨年の『良宵たがみ』で活躍した生徒たちも、これから経験する3年生も、生まれ育った田上町で『何かやりたい』という想いが芽生えたら嬉しいです。田上町で暮らす生徒たちが、グローバルな視点でSDGsを考え、できることから実現していく気持ちを育てることが重要だと思います」と今後の目標を語りました。



7. 竹林整備ボランティアが評価され、「令和5年度新潟県環境賞 環境保全部門」を受賞しました

竹林整備ボランティアを入りに 芽生えた地域愛

「良宵たがみ」では、自分たちが考えたことが地域の人の協力で形となり、商品化を通じて人の手に渡る感動を経験しました。小野先生は、「将来、生徒たちがどんな職業に就いても、自分たちで考えて実行した経験は必ず役に立つと思います。体験を通して、どんな力を身に付けることができたか、どの部分が成長したかを自ら見極め、次の目標を定めていくことが大切です」と話します。

今年も、生徒からは「たがみバンブー」への参加に加えて、町のためにできるSDGsに取り組みたいと意欲的な声が上がするなど、新たな視点も生まれているそうです。

「環境との向き合い方は人類の一番の課題であり、生徒たちには自分と周りの人たちが幸せになるために何ができるのか——。それを考えて行動してほしい」と小野先生。竹林を入りに芽生えた地域愛が、生徒の心に育っています。

TOPICS

東北エネルギー懇談会 新会長就任について

10月22日、東北エネルギー懇談会臨時総会において、新会長に森則之の就任が承認されました。

新会長の森は、1985年4月東北電力株式会社入社、広報・地域交流部課長、火力原子力本部電源立地部部长、執行役員火力原子力本部副本部長女川駐在地域統括、日本原燃株式会社専務執行役員青森地域共生本社代表などを経て現在、東北電力株式会社参与。宮城県出身。66歳。

なお、前会長の鴫田真孝は退任し、使用済燃料再処理・廃炉推進機構の副理事長に就任しました。



新会長
森 則之